

福祉サービス第三者評価結果報告書(平成30年度)

年 月 日

東京都福祉サービス評価推進機構
公益財団法人 東京都福祉保健財団理事長 殿

〒 166-0004

所在地 東京都杉並区阿佐谷南3-35-15-1104

評価機関名 特定非営利活動法人NPOサービス評価機構

認証評価機関番号

機構 02 - 030

電話番号 03-5347-0616

代表者氏名 理事長 大森 裕美

印

以下のとおり評価を行いましたので報告します。

評価者氏名・担当分野・評価者養成講習修了者番号	評価者氏名		担当分野	修了者番号
	①	大森裕美	経営	H0201035
	②	大森春樹	福祉	H1501022
	③	高原 武	福祉	H1701057
	④			
	⑤			
	⑥			
福祉サービス種別	障害児多機能型事業所			<input checked="" type="checkbox"/> 食事を対象にする
評価対象事業所名称	渋谷区障害者福祉センター代々木の杜			指定番号 1351300189
事業所連絡先	〒	151-0053		
	所在地	東京都渋谷区代々木2丁目35番1号		
	TEL	03-5371-1550		
事業所代表者氏名	施設長 三宅聖子			
契約日	2018年 10月 23日			
利用者調査票配付日(実施日)	2018年 11月 28日			
利用者調査結果報告日	2019年 2月 1日			
自己評価の調査票配付日	2018年 12月 6日			
自己評価結果報告日	2019年 2月 1日			
訪問調査日	2019年 2月 8日			
評価合議日	2019年 2月 11日			
コメント (利用者調査・事業評価の工夫点、補助者・専門家等の活用、第三者性確保のための措置などを記入)	職員説明会を開催し、第三者評価の目的・自己評価シートの記入要領・今後のスケジュールなどを説明し、第三者評価についての理解が深まるよう取り組んだ。利用者調査では、アンケート方式で実施した。評価機関からの調査のお願い文書&調査票&返信用封筒を施設側へ送付し、施設側から利用者個々に配布していただき、返信用封筒を使って直接弊機関へ送付していただいた。訪問調査では、幹部層等へのヒアリングや書類の確認を行い、評価員による合議を行い、報告書を完成させた。			

評価機関から上記及び別紙の評価結果を含む評価結果報告書を受け取りました。

本報告書の内容のうち、

- 機構が定める部分を公表することに同意します。
- 別添の理由書により、一部について、公表に同意しません。
- 別添の理由書により、公表には同意しません。

年 月 日

事業者代表者氏名

印

事業者が特に力を入れている取り組み①		
評価項目	6-4-1	個別の支援計画に基づいて子ども一人ひとりの発達の状態に応じた支援を行っている
タイトル①	コミュニケーション能力の伸長を通して、子ども一人ひとりの社会性の発達を促している	
内容①	言葉のみにこだわらず、いろいろな表現手段を使って子どもとのコミュニケーションを豊かにする努力をしている。将来を見通し、自立した生活の実現を意識して、子どもの受け入れやすいコミュニケーションの工夫をしている。子どもの特性を踏まえた、療育プログラムが作られ、言語聴覚士による、検査・相談も実施する等、社会性の基礎としてのコミュニケーション能力の伸長に努力している。言語によるコミュニケーションはもとより、言語表現の苦手な子どもにはマカトン等を含む、様々なサイン言語などで働きかけている。	

事業者が特に力を入れている取り組み②		
評価項目	6-4-3	子ども一人ひとりの状況に応じて生活上で必要な支援を行っている
タイトル②	子どもの状況に合わせて、発達を促す支援を行っている	
内容②	子どもの状況を踏まえ、自分でやろうとする意欲を育てる努力をしている。子どもが自立していくための基本的日常生活動作は、「できた」体験を積み上げる事を意識して丁寧に指導している。やり取り遊びやままごと等のルールのある集団行動で、心身の発達や社会性の成長を促す支援を行っている。同時に個別指導にも力を入れており、月2回ほど設けて支援をしている。個別のプログラムを組み、個々の発達課題にそった丁寧なかかわりをしている。子どもたちは、職員(大人)に認められる経験を積み上げ、発達の基礎としている。	

事業者が特に力を入れている取り組み③		
評価項目	6-4-7	地域との連携のもとに子どもの生活の幅を広げるための取り組みを行っている
タイトル③	子どもの発達に役立つ地域の情報を集め、保護者等に提供している	
内容③	区の関係機関とは綿密に連携を取り、就学等についての情報を正確に保護者に伝えている。また、ほとんどの子どもは並行通園をしているため、在籍する幼稚園・保育園等には必ず訪園して、子どもの様子、特に集団活動における子どもの様子や指導上の課題について、詳しく情報交換している。隣接する保育園との交流を通して、障害のある子どもたちへのかかわり方についても意見交換の場がある。これらの情報は、個別面談等の機会に、保護者に詳細に伝えられている。	

No.	特に良いと思う点	
1	タイトル	子ども一人ひとりの意思や選択を尊重した支援に努めている
	内容	日常的な活動や個別指導の課題の選択では、子ども一人ひとりの意思や選択が尊重されている。自分の気持ちを表現できることを重点目標に丁寧な指導をしている。課題等への子どもの拒否があった時、その気持ちを受け入れながらも、子どもが受け入れてくれるやり方・内容等を再提案している。子どもとのやり取りの中で、子どもの思いや行動の幅を広げられるように支援している。子どもの拒否等を否定的に捉えるのではなく、そこに込められた子どもなりの考えや思いを丁寧に聞き出し、見極めて支援の工夫につなげている。
2	タイトル	専用のアセスメントシートを使って、子どもの状況の詳細な把握に努めている
	内容	相談支援事業所が作成した「サービス等利用計画書」と連動した個別支援計画を年2回作成し、療育を実施している。また、個別支援計画の作成には、アセスメントシートを使って、子どもの状況や保護者の思いの詳細な把握に努めている。チェックシートを使って、個々の子どものニーズや課題を明らかにし、把握するアセスメントが行われている。同時に心理や言語聴覚士などの専門職の評価を計画に反映させている。その他にも活動グループの担当者を中心に、チェックシートの評価や課題について検討がなされ、個別支援計画の作成へと結びつけられている
3	タイトル	ペアレントトレーニングや、ペアレントメンターの活用、父親学級などを通して、保護者支援にも注力している
	内容	外部講師を導入し、2～5歳児の保護者にペアレントトレーニングの時間を設定し、療育や子育てにおける保護者の不安の解消に取り組んでいる。応用行動分析に基づくペアレントトレーニングは、保護者からも具体的な子どもへの対応がわかって良かったと好評であった。そのため、継続して実施するため、職員も応用行動分析学を用いた療育について研修を実施している。また、保護者同士の情報交換できる場やメンター（先輩保護者）との茶話会、父親の参加しやすい交流会（父親学級）などを企画実施している。
No.	さらなる改善が望まれる点	
1	タイトル	保護者ニーズにできる限り応えられるよう、放課後等デイサービス事業の運営体制について検討されることを期待する
	内容	放課後等デイサービスの利用対象者は概ね小学校1年生から3年生である。利用者調査では、「小学4年生以降もピア・キッズに通いたい」「デイサービス修了後も、月1回程度通いたい」「通所できる日を増やしてほしい」「療育時間が短いことが不満」などのコメントが寄せられていた。施設側も、保護者の要望に応じて、次年度より利用期間の延長を検討している。職員体制を考慮しながらも、利用期間の延長や、利用回数について検討されることを期待する。
2	タイトル	ボランティアの受け入れ体制の充実が望まれる
	内容	施設側は、兄弟姉妹の預け場所がないために療育に来れない等の対応として、兄弟預かり等のスタッフの必要性を認識し、そのためのボランティアを1名確保したところである。利用児の兄弟姉妹を預かるボランティアは、保護者の負担軽減を図り、利用児の円滑な通園をサポートできる。その他、施設として、どのような場面で、どのような活動にボランティアを導入するのか、また、ボランティア導入時や活動の継続を図るための工夫や仕組みなど、ボランティアの受け入れ体制の充実が望まれる。
3	タイトル	ケース会議の定期的な実施など、職員育成のさらなる充実を期待する
	内容	同一法人同区内の「はあとび原宿」の内部研修や法人主催研修、外部研修など、多様な学びの機会を設けている。しかし、職員アンケートでは、「定期的に利用児のケース会議を実施したい」とのコメントが寄せられていた。施設側もケース会議を行なう時間の確保が課題とし、計画的な研修プランの再構築が必要と考えている。ケース会議を通して、他職員の意見に気づきを得るなど、職員の学びを深めることができる。ケース会議の定期的な実施など、職員育成のさらなる充実を期待する。